

初級編

「加賀ふるさと検定」受験生のためのテキスト

げんし こだい 原始・古代編

加賀市には、縄文、弥生、古墳時代を中心とした埋蔵文化財遺跡が、これまでにおよそ850ヶ所余りが確認されており、この数は、県内でも1，2を争う数を誇っています。

古代遺跡が多いということは、この地域が、水に恵まれた自然豊かなところであり、とても住みよい土地であったとも言えます。

私たちのふるさと加賀市で、最も古い人類の痕跡は、宮地町にある琵琶ヶ池の近くで見つかった宮地向山遺跡です。この遺跡は、旧石器時代（今からおおよそ1万3千年以上も前）のものですが、ここからは石刃や搔器などが見つかります。また、橋立丘陵地で発見された縄文時代早期（今からおおよそ9千年前）の橋立大野山遺跡からは、県内最古の土器が出土しています。

市内の850余りの遺跡の中には、国の史跡に指定されています。勅使町の法皇山横穴群や二子塚町の狐山古墳をはじめとした、全国的にも有名な遺跡があります。それでは、このあとは、縄文、弥生、古墳の各時代を代表する市内の遺跡を順に見ていきましょう。

縄文時代

今から約1万2千年前から約2千4百年前を「縄文時代」とよんでいます。この時代の遺跡の中で特に特徴的なものとしては、「柴山水底貝塚遺跡」「柴山貝塚遺跡」「横北遺跡」「藤の木遺跡」などをあげることができます。

昭和39年、柴山瀧干拓工事の際に湖底約6メートルのところで柴山水底貝塚遺跡が発見されました。ここからは無数の貝類や土器片約200点、人骨な

どが出土しました。

一方、柴山町の北側、標高30メートルの台地でも縄文中期の柴山貝塚遺跡が発見されました。ここからは、三角壻形土製品をはじめ、8戸におよぶ住居跡が発見され、そのうち4戸には石囲いの炉跡も確認されました。

動橋川のなかほど、東谷口地区の水田の中から数多くの石器や土器が発見されました。これが縄文時代後期の横北遺跡です。出土遺物の中では、特に、県内でも珍しい、菱型をした注口土器や呪術用具とも考えられている異形土製品などが出土しています。

大聖寺川右岸の辺りで発見された藤の木遺跡は、県内でも最多の縄文中期の土器が発見されたほか、石斧やきれいな石でつくられた装身具などが多数出土しました。

弥生時代

今からおよそ2,500年前、日本ではじめて稲作がおこなわれるようになりました。弥生時代のはじまりです。米づくりをするようになって人びとは定住生活をはじめようになりました。当地域にも稲作が行なわれたことが柴山出村遺跡や猫橋遺跡で確認されました。

柴山出村遺跡は弥生時代後期の遺跡で、北陸では最も古い籾や県内最古の弥生式土器が発見されました。また、隣接して柴山水底弥生遺跡も発見されたことから、この周辺では、柴山潟沿岸の湿地をそのまま利用した原始的な稲作が採り入れられていたと考えられています。

一方、猫橋遺跡は、市内合河町の八日市川にかかる猫橋付近を中心とした広い地域で発見された弥生時代後期の遺跡で「北陸の登呂遺跡」とも称される有名な遺跡です。この付近では、田んぼを掘ると水が湧き出るほどの湿地帯で、このような環境が木製品などを「水づけ」のまま永く保存するなどの好条件をうみ、1,800年前のしゃもじ、くわ、はしごなど、貴重な木製品が、ほぼそのままの形で発見されました。また、稲づくりを示す炭化した米粒や大きな柱を使ったと考えられる倉庫跡や平地における住居跡、さらには方形周溝墓

も確認され、こうした数々の遺構や出土物から、この時代、当地には、すでに村を統率する首長が存在していたと思われます。また、この遺跡から出土した土器の形から、山陰文化圏との結びつきが極めて強いことも分かりました。

古墳時代

3世紀後半から7世紀にかけての古墳時代、当地方でも多くの古墳がつくられています。古墳は、力のあった豪族や一族のお墓で、加賀市では、特に分校町の国道8号線付近や吸坂町から黒瀬町に至る丘陵地などで数多く確認されています。また、片山津玉造遺跡や国指定史跡である法皇山横穴群や狐山古墳などは、全国的によく知られた古墳時代を代表する遺跡です。

分校町から松山町にかけての丘陵地には40基あまりの古墳が密集しており、全体を分校古墳群と呼んでいます。この古墳群は、分校前山古墳群、分校墓山古墳群などの支群に分かれています。特に、分校前山古墳群からは中国製の銅鏡で、大和朝廷が江沼の王に与えたものではないかとされる「鋸齒文縁方格矩四神鏡」と称する当地方では最も古い鏡が発見されています。

南郷町から吸坂町、上河崎町にかけての丘陵地には、およそ85基もの古墳が密集しており、南郷・黒瀬古墳群と呼ばれています。このうち、支群である吸坂丸山古墳群からは、鉄製冑をはじめ、鶏形土製品や金製の耳環など、貴重な副葬品が出土しています。

市内片山津町の西側の台地では、昭和34年、35年の発掘調査により、4世紀から5世紀前半にかけての玉造職人集団が住んでいたとされる片山津玉造遺跡が発見されました。ここでは、33基の住居と工房を兼ねた竪穴式住居跡が発見され、首飾りなどの装飾品に使う管玉や勾玉などの玉類を製造していたと考えられています。ここで使用されていた原石の多くは緑色凝灰岩質の頁岩で、これらは動橋川の上流で採取したものと考えられています。

一方、昭和7年に、二子塚町地内で、動橋川の堤防工事のために必要とする土取りをしていたところ、箱型の石棺が発見されました。調査の結果、5世紀中頃の前方後円墳だと分かりました。これが、現在、国指定史跡となっている狐山

古墳です。石棺の中からは、成人男子の人骨のほかに銅鏡「画文帯神獸鏡」や銀製帯金具、刀などが発見されました。これらの副葬品から畿内勢力との強い結びつきがうかがえ、この地域の統治に成功した江沼臣の一族に関係する古墳ではないかと考えられています。なお、この狐山古墳のすぐ近くから、盾を持った人物埴輪も発見され、北陸地方では極めて珍しいものとされ、こうした出土品は、現在、東京国立博物館に保管されています。

また、勅使町では、大正11年に考古学者の上田三平により、6世紀中頃から7世紀末にかけて法皇山横穴群が確認され、昭和4年には国の指定史跡となりました。法皇山の麓や中腹には、現在までに80基あまりの横穴が確認されており、古くは、原始人が暮らした洞窟だとか、宝物の隠し場所などと言われていましたが、調査の結果、古代人を埋葬した横穴墓であることが分かりました。これらの横穴の数は、詳しく調べれば、恐らく200基以上はあるだろうと考えられており、日本海側では最大級の横穴古墳群として知られています。この古墳に葬られた人々は、動橋川中流域に住んだ当地域の有力な一族の墓地と考えられます。

なお、富塚町にも、富塚丸山古墳と呼ぶ大きな古墳の一部が残されていますが、もしもこれが前方後円墳であったとすれば、手取川以南最大の古墳であったといえます。富塚に眠る王も、江渟国に君臨した大きな力を持つ権力者だった可能性があります。

飛鳥・奈良時代

6世紀中頃に朝鮮半島より仏教が伝来し、畿内では次々と古代寺院が建立されるようになりました。江沼地方においても、有力豪族たちがこれまでの古墳に代って、氏寺を建立するようになったと考えられており、現在、この時代に建てられた寺院として、宮地、弓波、津波倉、保賀、高尾の5ヶ所から瓦や土台石など寺院跡と思われる出土物や遺構が確認されています。特に、宮地町と篠原町との間の水田の中に「じょうじゃのかま」と呼ばれる大きな石があり、宮地廃寺の塔心礎に使われた石とされています。同じく、弓波町の忌浪神社で使われている手水鉢は弓浪廃寺の塔心礎に使われた石とされています。

大宝律令の制定（701年）により江沼地方は「越前国江沼郡」となり、郡内には、長江、忌浪、山背、竹原、額田、菅浪、八田、三枝の8郷、または郡家郷を加えての9郷が置かれました。古代の首長であった江沼氏は、律令体制の中で郡司として地方行政官に位置付けられ、西島遺跡は、建造物の規模や出土品などから、一般住宅とは考え難く、律令制下の郡の中心官庁である郡家もしくは有力豪族などの住居として使われたものではないかと考えられています。

この時代、国家統一の機能を確保し、中央と地方の連絡が円滑になされるために、交通路が整備されました。当地では、古代官道である「北陸道」と、その中継機関として「駅」が設置されました。江沼郡域では、越前から加賀に入ると、先ず「朝倉駅」に、その次に「潮津駅」に出て、小松の安宅へと抜けていきました。

奈良東大寺の正倉院文書のなかに、天平12年（740）の「越前国江沼郡山背郷計帳」の一部が残っています。この計帳は、現在の戸籍に相当するもので、人民から税をとるための台帳として作成されました。特に、山背郷計帳は、江沼臣族の一族を家族単位でリスト化したもので、氏名や家族関係、その人の特徴までも記録されておりとても興味深いものです。

このほか、正倉院文書の中には、税として収める稲や粃の比率などを記載した「越前国正税帳」や「越前国郡稻帳」なども残されており、これらの文書は、当地域の社会構造を知るうえに貴重な資料となっています。

平安時代

平安時代に入ると仏教がますます盛んになり、古来よりの白山信仰が、仏教思想と結びつきました。当地域では、柏野寺、温泉寺、極楽寺、小野坂寺、大聖寺の五つの寺院が「白山五院」と呼ばれ、白山信仰の拠点地として建立されたことが平安後期の書『白山之記』に記載されています。この5つの寺院のうち、温泉寺は現在の山代温泉薬王院だとされています。また、極楽寺は大聖寺畑町に、大聖寺は、現在の錦城山から荻生町にかけての山の上にあった寺院と考えられ

ています。このほか、「白山三箇寺」として那谷寺（小松市那谷町）、温谷寺（加賀市宇谷町）、栄谷寺（加賀市栄谷町）があり、この頃、当地方は白山信仰の中心地となっていたことをうかがい知ることができます。

現在、山代温泉薬王院に安置されている「木造十一面観音像」は、もと大聖寺慈光院の本尊として祀られていましたが、戦国時代、大聖寺城主山口玄蕃が前田利長に攻め滅ぼされた際に、池の中に投げ入れられ難を逃れたと伝えられています。明治維新後、同じ白山五院のひとつであった薬王院に移されたものです。平安末期の白山信仰の本地仏として貴重な仏像であり、現在、石川県の有形文化財に指定されています。

また、この頃、全国各地で、勢力をもった都の貴族や社寺の私有地が増え ていきました。これを荘園と呼び、江沼郡では、熊坂庄、山代庄、福田庄、富墓庄（柴山荘）、額田荘、横北郷などがこれにあたるものとされています。この荘園の持ち主は領主と呼ばれていましたが、当地では、かつての江沼臣にかわって、土着した国司の末裔である大江氏が、荘園の現地管理者となるなど、在地における有力土豪として勢力を伸ばしました。

寛治4年（1090）に加賀守であった藤原為房が、加賀国府から淡津泊を中継点として敦賀津へ向かった記録があり（『為房卿記』）、当時の貴族たちが、京と加賀国の往来に船運を利用していたことが分かります。中世後期の江沼郡の流通路は、額田十日市や八日市、七日市等の庄園市場を繋ぐ内陸の横軸と、日本海沿岸の安宅湊や竹ノ浦泊を繋ぐ河川を通じた縦軸をもっていたといえます。

鎌倉・室町・戦国時代

平安時代、都では、藤原氏をはじめとした貴族が朝廷の重要な役職をひとりじめにして、絶大な権力をもっていました。やがて、地方の荘園を管理する郡司や豪族たちは、自分たちの土地を守るために武装し、武士団としての力をもつようになりました。その代表が清和天皇の子孫にあたる源氏と、桓武天皇の子孫にあたるは平氏の2大勢力でした。

特に、平安時代末期になると、平清盛は、藤原氏にかわって朝廷を動かすほどの力を持ち、ついには「平氏でなければ人でなし」と言われるほどになりました。しかし、平氏の目にあまる横暴は、ほかの貴族や武士たちの反感を買い、各地にひそんでいた源頼朝やその弟、源義経、従弟の木曾義仲らを中心とした源氏が拳兵しました。

寿永2年(1183)平家軍は、倶利伽羅で木曾義仲に大敗し、加賀国篠原(現在の加賀市篠原町あたり)まで逃れてきました。この地で、平家の武将、斎藤実盛は、義仲の家来、手塚太郎光盛に討ち取られました。戦さのあと、義仲が、老武者の髪が黒々としているのを不思議に思い、近くの池でその首を洗わせたところ、白髪まじりの実盛の姿があらわれてきました。義仲にとって、実盛は、幼いときに平氏から命を救ってくれた恩人だったのです。実盛は老武者と思われることを嫌い、白髪を黒く染めて参戦していたのでした。

この実盛の首を洗ったと伝える池が「首洗池」(加賀市手塚町)で、その霊を鎮めるために築いた塚と伝えられるところが「実盛塚」(加賀市篠原新町)なのです。また、実盛が白髪を染めるときに使用した鏡を投げ入れたとする池が深田町の「鏡の池」です。

文明3年(1471)7月、本願寺8世、蓮如が加賀・越前の国境、吉崎に道場を開きました。当時、蓮如は比叡山延暦寺衆徒に追われ、近江(滋賀県)を転々としていましたが、ついには北陸にまで避難するかたちで、吉崎に拠点を立てて教団の拡大を図ったのです。吉崎御坊にはまたたく間に多くの参詣者がつめかけるようになり、吉崎は仏教都市になりました。しかし、ここでも周囲の

権力者や他宗との間に軋轢が生まれ、結局、蓮如は、文明7年（1475）吉崎を後にしました。この間、江沼郡の山田に山田坊を開創し、そこが文明18年（1486）頃に蓮如の4男、蓮誓が江沼郡中として取り立てられて光教寺と号し、能美や河北の拠点寺院とともに、いわゆる「加賀3ヶ寺体制」がしかれました。

こうして、北陸一円では蓮如上人のもとで浄土真宗が急速に広まってきましたが、その背景として浄土真宗の本尊が白山大汝峰の本地仏である阿彌陀如来であったことが考えられます。白山信仰や浄土真宗は、近世以降も引き継がれ、現在も市内の神社の5割弱で白山神を祀り、また、寺院では浄土真宗が8割を上回るなど、白山信仰と浄土真宗は、当地の信仰心の核となっています。

蓮如が京都へ帰ったあとも、こうした浄土真宗の門徒たちは、一向宗の門徒として力を発揮し、隣国、越前の守護、朝倉氏ともたびたび戦さをしています。山中町滝町と荒谷町の間位置した赤岩城では藤丸新助が、また、作見の千足城では湍山津大助や振橋帯刀などといった人物が、一揆勢の大將として活躍しました。

天正3年（1575）長篠の合戦で武田軍を破った織田信長は、北陸を平定するために越前に侵入した。羽柴秀吉や丹羽長秀、柴田勝家らの織田軍の先鋒は、ついには加賀へ討ち入り、大聖寺、敷地、山中の各城を攻め落とし、江沼郡を占領しました。その後、能美の一揆勢も破って手取川まで進出した。ここに、江沼・能美の両郡は、百年近くに及んだ一向一揆と本願寺配下から離され、新たに織田信長の占領下に入ることとなりました。

このあと、信長は北陸総司令官として柴田勝家を越前北庄（現在の福井市）に置き、江沼地域の拠点であった大聖寺城には、天正4年に、戸次右近広正が、天正8年（1580）には柴田勝家の家来、拝郷五左衛門家嘉が城主となって当地を治めました。